The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	セクシュアリティのハイブリディティ : オリエンタリズム、ポストモダニズム、ポストフォーディズムのロシア文学における〈日本〉
Author(s)	Galvane, Linda
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/53879
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名	（ガルワーネ・リンダ（Linda Galvane））
論文題名	セクシュアリティのハイブリディティ ―― オリエンタリズム、ポストモダニズム、 ポストフォーディズムのロシア文学における〈日本〉――

論文内容の要旨

ロシア文学における日本人の表象を論じた研究には既に多くの蓄積があり、それらは日本人のイメージはどのように日露関係の変化を表すのか、そして、ロシアの特別な〈オリエントでもあり、オクシデントでもある〉という位置のため、ロシア人のコンプレックスや自己評価の変容をどのように表現してきたのかを考察してきた。先行研究で指摘されているように、日本人を描くことが、ロシア人の自己のアイデンティティを確立する機能を担ってきたことを否定できない。だが、それらの研究では、ロシア人のアイデンティティ自体は曖昧であり、つまり、ロシア人の東洋人と西洋人の間に揺れるものとされるのだが、ロシア人対日本人という二項対立自体は確固たるものとして保持されている。つまり、ロシア文学における日本人の表象のハイブリッド性は――人種的な意味であれ、文化的な意味であれ、テクスト上のものであれ――完全に無視されている。それに加え、日本人女性をめぐってどのようにロシア人が自己のアイデンティティを形成していたかという問題も、日本人女性の表象の仕方でいかにロシアが独自だったかという点もほとんど無視されている。本論文の主題は、上記に取り上げた先行研究に対する、本論文の筆者の見るところの不満から生じたものである。従って、本論文は日本人女性の性的な表象を中心として、各章ごとに何らかの一つのハイブリディティの表現――テクストとして、混血児の表象として、サイバー・ハイブリディティとして――に注目し、時代背景を参照しつつ作品にテクスト分析を行うことで、その特徴を明らかにし、ロシア人の両面的なアイデンティティとの関係を探ることも試みた。

第一章では、ロシアにおける日本人表象を考察する研究の中でこれまでほとんど注目されてこなかった、ロンドンで1896年に初演されたシドニー・ジョーンズ作曲、オーウェン・ホール脚本、ハリー・グリーンバンク作詞のオペレッタ『ゲイシャ』を中心に論じ、このオペレッタのロシア版における翻案や改作の特徴を考察するとともに、その成功の理由を検討した。

ロシアにおける「ゲイシャ・マニア」は当時のロシアにおける日本趣味の影響を表現し、さらに他の作品をも生みだしたことが分かった。そして、『ゲイシャ』のテクストは、他者を受容する側の文化の価値観に合わせた変更が加えられたが、ロシアにおいては、芸者は〈売春婦〉という〈他者〉であるだけではなく、文化的にも（あるいは民族的にも）〈他者〉となっていたのである。それは、芸者のイメージは当時ロシアの軽演劇に合わせてロシアの内なる〈他者〉である、自由で、西洋や東洋の境界線で拘束されていないとされたジプシーやフランス人女性のイメージと結びつけられた、ハイブリッドなカフェ・シャンソンの歌手に例えられたからである。また、芸者は、一方で、誘惑する、そして楽しく喜ばせる、または見た目も軽い女性というイメージを持ち、他方、男性や社会の犠牲者というイメージも含んでいたので、両方のイメージが『ゲイシャ』の中で表象されているし、当時、芸者と結び付いてオペレッタ以外にも存在した、ロシア人のカフェシャンタンの女性はある意味で芸者に〈変容〉させられたというような過程も見られる。そして、オペレッタが中露関係の展開によって更新され、ソ連時代の前半では『ゲイシャ』をソ連のイデオロギーに合わせようとする過程が見られ、そこではさらにハイブリッドな『ゲイシャ』が形成された。しかし、オペレッタ『ゲイシャ』に表象されていた日本・ロシア・中国・ヨーロッパの間の関係は完全に変り、その作品の改作が不可能になって以来、『ゲイシャ』という作品は完全に消滅したことが明らかである。このように、ロシアにおけるロシア人女性の表象をめぐるディスクール、そして歴史的な日本・ヨーロッパ、中国とロシアの関係の特徴は、最初にジャポニスムと一緒にヨーロッパから入ってきたオペレッタ『ゲイシャ』のロシアなりの、様々な意味でのハイブリディティを明らかにした。

第二章では、オペレッタ『ゲイシャ』と同じように、芸者のイメージを中心とするオルガ・ラゾレワの三部作『ロシア人芸者』（2006-2008）を論じた。この三部作に登場する、ロシア人と日本人の混血児である〈芸者〉は第一章で

考察してきたオペレッタ『ゲイシャ』と同じように、ロシアにおける女性をめぐるディスクールと緊密な関係を持っていることが明らかになった。『ロシア人芸者』は多様なテクストによって形成されてきた、サドマゾヒズムを含んだ日本人のエキゾチックなセクシュアリティを紹介しようとし、そこで主人公の混血性は二つの――ロシアと日本――文化を「体験」することを読者に可能にするために使われている。しかし、最初に変態と見なした日本を差別する作者および主人公の視線は第一作から第三作にかけて作者がテクスト上、日本文化になじむに連れて変わって行くだけでなく、この三部作はロシア文学における日本人男性の表象、日本人男性と売春婦として体を売るロシア人を描写してきたロシア文学の作品、ロシア人女性の人身販売、そして現代ロシア人女性の男性の目線から自由になる試みなどのテーマとの対話のように進む。従って、『ロシア人芸者』は完全にミハイル・バフチンの対話理論が提示したようなダイアロジックな作品であり、主人公が芸者で、しかも混血児であるトリックスターの役割は作者の日本文化やロシア文化に向けられた偏見や賞賛、そして家父長制度の社会の中で自立した女性や男性を経済的に利用する女性の立場のバランスを取ろうとする試みが見られることが明らかである。

第三章では、日露戦争のロシア人捕虜、特にフョードル・レインガートが自分と日本人との関係を描いた著書から影響を受け、1911年に出版されたフィリップ・クプチンスキーの『おいくさん』という小説を中心とした。捕虜の著書の中で、敵であるはずの捕虜に優しく接し、全てを犠牲にしようとする日本人女性は肯定的に描写されているが、その日本人女性に売春をさせる日本の文明化の遅れの描写、欧米人の人種的な優越の強調、そして〈異人種間の性的な関係〉を可能にした混血児の女性のイメージは、西洋人としてのロシア人の優越感を強調するために使われていた。また、捕虜の著書の中では、彼らの性的な対象となっているのは、日本人のエキゾチックなセクシュアリティを一般的に象徴する芸者ではなく、実際の看護婦や、捕虜の孤独を軽減させる〈精神的看護婦〉の女性であったことは非常に重要なポイントである。それは、ロシア人捕虜が、経済的な関係のない〈精神的看護婦〉に挿入することを想像し、兵士としての矜持、さらに男性としての自尊心を回復しようとする試みであった。そして、捕虜を好きになり、ロシア人男性のせいで悲しむ日本人女性をサディスティックな快楽を感じながら眺め、ロシア人の捕虜だけでなく、ロシア人の読者も日露戦争で失った力や自尊心を回復し、自分の優越感を再び確保できたと思われる。このように、第三章では、性的な対象となる混血児というハイブリッドな日本人女性のイメージを、実際に体験した日本や、さらには想像上の〈日本〉と組み合わせ、自らもテクスト上でハイブリッドな存在となった、捕虜の著者のありようを考察してきた。

第四章では、インターネットを通じたグローバル化、そしてポストモダニズムの曖昧さの中で、男性の性的な対象となるヴァーチュアルな〈日本人女性〉を表象したヴィクトル・ペレーヴィンの、2003年に出版された短篇小説「アキコ」を考察した。ペレーヴィンは〈日本〉というテーマを自分の多くの作品に使われてきた。作者自身も彼の作品を考察してきた評論家や研究者も「アキコ」をふくめ、ペレーヴィンの作品における日本のテーマをゼロ記号として説明する。しかし、本論文では、まずは「アキコ」のテクストを分析し、この作品の三つの読みの可能を明らかにした。一つは、「アキコ」を、日本人の女性を性的な対象とするオリエンタリストの、日本への〈セックス・ツアー〉と読む見方である。もう一つの読みは、サイバー・オリエンタリズムの描写としての読みである。さらに、日本というテーマを脇におくと、「アキコ」では日本の趣味を利用し、ウェブサイトを管理するロシア人が〈日本〉という〈商品〉を販売するさまが描かれているが、作品の中でほのめかされている、現実と非現実の相対性によって、ヴァーチュアルな〈商品〉の消費はポストフォーディズムの消費主義全般の象徴となり、現実と非現実の相対性というテーマが表現されることになる。このような三つの読みの中心には日本人女性のセクシュアリティの表象があるが、それは第三章で考察してきた捕虜の作品とは全く違った意味を持っている。ペレーヴィンは、男性の性的なファンタジーとなる日本人女性のイメージが、全てはシムラークルであるというポストモダニティーの中で〈現実性〉を求めようとすることの無意味、ポストモダニズムの資本主義の（シムラークルである）自分のイメージの消費と商品化を表現していることを、重層的な読みのできる作品の中で、明らかにした。

本論文の四つの章で取り上げた作品の広がり、そしてそれらにおけるハイブリディティの多様性、作者の種類の多様性（改作者であったり、翻訳者であったり、あるいは、女性の作者、捕虜、セレブのような扱い方を受けるポストモダンロシア文学の作者であったりする）を考えるとき、本論文の内容そのものがきわめてハイブリッドであることが分かるが、それは文化史における、ロシア文学における日本人女性の表象というもののハイブリッド性の反映である。そのようなハイブリディティが、オリエンタリズム、ポストモダニズム、ポストフォーディズムといった、一見、必ずしも連関していないような文化的諸現象を貫く糸として描き出すことが、本論文の目的であった。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　ガルワーネ・リンダ　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　准教授	橋本順光
	副 査	広島大学　准教授	溝渕園子
	副 査	大阪大学　教授	北村卓
	副 査	大阪大学　教授	清水康次

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　セクシュアリティのハイブリディティーオリエンタリズム、ポストモダニズム、ポストフォーディズムのロシア文学における＜日本＞－

学位申請者　ガルワーネ・リンダ

論文審査担当者

主査　大阪大学准教授　橋本順光

副査　広島大学准教授　溝渕園子

副査　大阪大学教授　北村卓

副査　大阪大学教授　清水康次

【論文内容の要旨】

本論文は、ロシア文学における日本人女性の表象を、19 世紀から 21 世紀までの作品から分析し、ユーラシア大陸にまたがる両義的なロシアに特有のハイブリディティを指摘しようとするものである。

第一章「オペレッタ『ゲイシャ』のロシア版における芸者の表象」は、1896 年に英国で上演されて好評を博した『ゲイシャ』について、ロシア版にみる翻案と改作を詳細に発掘し、成功の原因を考察している。その際に、ロシア版に登場する「芸者」が、ロシアで内なる他者とみなされていた「ジプシーやフランス人女性」を援用したハイブリッドな存在であることが一因として挙げられ、その後、『ゲイシャ』は忘却されたものの「チン・チン・チャイナマン」の歌が中国批判に援用された事実が指摘される。

第二章「Ｏ・ラゾレワの『ロシア人芸者』における混血児の芸者の表象」では、オルガ・ラゾレワの三部作『ロシア人芸者』(2006-2007)が論じられる。オリエンタリズム的な差別と偏見に満ちた日本表象から、家父長制の中で男性を利用しつつ自立をはかる日本人女性表象へと、対話と理解が進む三部作の物語の変化に、ロシアと日本という主人公自身のハイブリディティが重ねられることになる。

第三章「日本に収容されたロシア人捕虜の著書における日本人女性の表象－Ｆ・レインガルトとＦ・クプチンスキーを中心に－」は、日露戦争時、松山の捕虜収容所で過ごしたロシア人将校の記録と、そこから着想を受けた小説『おいくさん』(1911)を比較しながら考察している。記録においては、エキゾティックなゲイシャではなく、「看護婦」の存在がセクシュアリティを象徴する一方で、小説で前景化されるのは「混血」の日本人女性であり、それが「日本」で捕虜となることでハイブリッドな存在となったロシア人と通底していることが指摘される。

第四章「ヴァーチュアルな日本人女性」は、ヴィクトル・ペレーヴィンの短編小説「アキコ」(2003)を中心に論じられる。男性の性的な幻想と冒険が展開される「日本」という点で、これまでの作品を継承しつつ、そこにポスト・フォーディズムのシミュラークルとしての消費が見られる相違点を強調し、ハイブリディティの変異を指摘する。

【論文審査の結果の要旨】

19 世紀から 21 世紀までのロシア文学における日本人女性の表象を、ハイブリディティに注目することでその連続性に注目し、近年の変容を指摘した力業は十分に評価できる。ロシア語、英語、日本語の一次資料と研究文献を縦横無尽に引用し、これまでほとんど研究のなかった『ゲイシャ』のロシア版の重要性の指摘に始まり、日露戦争からオウム真理教事件にまで至る時代の変化に呼応した「ゲイシャ」表象を 216 ページの大部（400 字換算約 600 枚）に読みやすい表現でまとめあげたことは特筆に値しよう。

しかしながら、ハイブリディティという便利な用語に寄りかかりすぎたきらいは否めない。審査員からは、セクシュアリティのハイブリディティは、そのままロシアのナショナリティやエスニシティのハイブリディティに重ねられるのかどうかについて、多くの疑義が寄せられた。西洋であると同時に東洋でもあるロシア固有の問題が日本人女性の表象に描き込まれていると記しながら、ハイブリディティの指摘に割かれた紙数に比べて十分な分析がなされていない点も不満が残る。関連して第四章では、ハイブリディティが後退してシミュラークルの概念が援用されることで、「ゲイシャ」幻想についてのこれまでの議論が分断された感がある点も惜しいことといわねばならない。

個々の議論については、日本人女性の表象と議論を限定する旨を断ってはいるものの、諸処で言及される日本人男性の表象との関係はしかるべき考察が可能だったのではないかという指摘があった。いわゆる大衆文学を扱うだけに、物語の変化や本文の緻密な分析は読者の要望や時代性を考慮してこそ意義をもつため、広義の日ロ関係や日本表象との関連をもっと盛り込む必要性もあったかもしれない。つとにハイブリディティに注目した研究のあるロシアのジャポニスムについて、言及がほとんどなかったことも、しかるべき調査と関連づけが望まれよう。

上記のような憾みを残しつつも、誤記誤植については詳細な訂正表が配布されるなど、これらの問題が著者のたゆまない努力と調査によって十分に乗り越えられるべき課題となっていることについては審査員一同見解が一致しており、今後、それらを統合した成果が発表されることについても高い期待が寄せられた。以上のことから、本論文を博士（文学）の学位にふさわしい十分な価値を有するものと認定する。